

旅館（この旅館は今も同地で営業している）へ泊った。旅行のしおり持物欄には「米九合、三合はなるべく白米、六合は麦を入れてもよし、漬物等も持って行く方が都合が良い」などと記載されている。

家では母が冠婚葬祭のお義理を面倒がり、子どもで済むところへはわたしを伺わせた。だからわたしは、当時大人の口上がとても上手に話せた。母と祖母はお互いあまり喋らず、それぞれ、わたしの成長だけを楽しみにして慎ましやかに暮らしていたようだ。

第四章 青春の日々

一、風越高校時代

昭和二十五年四月五日、わたしは風越高校へ入学した。

終戦後、義務教育になった中学校を終えて後、受験をして高校へ進むという学制改革が三年前より行われた。わたしたちの学年は、実質的な新制中学の第一回の卒業生として高校受験をしたということになる。

当時、男子は高校へ進む以外は、長男は家で農業を手伝ったり、次・三男は東京へ就職する人が多かった。女子は中学校を終えると関西の紡績工場へ就職する人が多く、下久堅中学校の女子五十余名中、風越高校普通科へ進んだわたしを含め高校へ進学した人は普通科四名、被服科へ二名の六名だけだった。旧制の飯田女学校は、以前は尋常高等小学校（昭和十六年から国民学校）を終えて受験、一五〇名程が入学できただけだったのが、新制高校では四二〇名程が入学できるようになった。試験は一日だけになり、進学希望の人は殆ど入学できたので、合格したと言っても私はあまり感激が湧かなかった。



小浜先生の似顔絵を持って行進した体育祭

枝先生が担任、二年三年はネクタイの素敵な臙脂うんじの君きみと仇名あだなされた若い小浜政興先生のクラスだった。

クラブ活動は三年間、書道クラブに属し、流麗な字を書かれる土屋博志先生のもので勉強した。わたしたちが一年生の時、今も続いている飯田市公民館主催の南信書道展が始ま

り、二年三年と出品し賞をいただいた。また三年の時は県展へ出品する対幅の細字を集中して書くため、一日学校を休んで書いて入選したこともあった。

三年生になり、中学と同じように修学旅行があった。関西と関東に分かれての旅、私は中学で奈良などを見学しているので関東コースを選んだ。伊豆大島へ、伊豆の伊東港より船に乗って行った。二五〇トン級の船に定員過剰の人数が乗船したせいか、湾の外に出ると揺れが強くなり、ひどく酔いになってしまった。大島三原山山頂では景色を楽しみむより「明日またあの船に乗り酔わなくてはならないのか」と、海を眺め心配の方が先に立った。けれども帰りは一二〇〇トン級の船とかで揺れず、したがって全然酔うこともなく、甲板に出て精一杯歌を唄っての楽しい船旅になった。

祖母と母が守ってくれている家のことも特に心配せず、忽ち三年間が過ぎた。

二、飯田病院に勤務

昭和二十八年三月風越高校を卒業した。

当時はまだ進学や就職する人が少なく、家事や農事など家の手伝いをしながら、洋裁・お花などの花嫁修業の後お嫁に行くのが普通の時代だった。わたしもそうした当時の慣習にしたがい、卒業後は自宅にいるつもりだった。六歳より祖母、母と女三人の暮らしを続



飯田病院に勤務

病院での仕事は、入院患者に給食を出す給食事務の助手ということで、仕事場は調理室脇の事務室であった。助手は栄養士の和子さん（院長の嫁で、母の従妹、自由学園生活学校卒）と風越高校定時制へ通っている北原さんとわたしの三人。和子さんが調理室主任の篠田さんと献立を立て、北原さんは窓口会計、わたしは献立の栄養計算などをした。

気に入って働いていたのだが、翌二十九年三月まで半年勤めただけで辞めることになった。というのも、わたしの家から近くの三枳屋へ養子に行かれた和一大叔父がもってこられ

の基礎となっており、感謝している。

この頃、働いている周囲の同年配の友人や知人もあって、勤め仕事がしてみたくなくなった。飯田病院は明治の終わりに母の大叔父（原耕太郎）が創業した病院で、当時、原農夫（耕太郎嬢婿）叔父が院長で、他にも叔父・叔母他、親戚の人たちが何人も勤めていた。わたしも勤めたいと思うようになった。女性が職業に就くというのは何か新しい時代の風潮のような感じもあった。今思うと、せっかくなきちんとよい勉強を続けていた洋裁を九月で止めてしまったのは残念だったが、十月から飯田病院へ勤めることになった。

入会早々、飯田友の会でも読書を中心とした衣・食・住・家計の基礎を学ぶ「生活講習」を始めることとなり、第一回の講習が開かれ、ベテラン会員を講師として会員の高氏さん宅で十三人の友と共に学んだ。友の会は後年多忙になったので退会させてもらった。これらの経験や勉強は何も知らなかったわたしにとって、今に至るまでの生活や考え



「友の会」に入会

けて来ており、「学校を卒業したら早く養子を貰わねば」と周囲から言われていることも承知していたけれども、何がしたいという自分の意見もあるわけではなく、言われるままに時を過ごしていた。それでも、洋裁くらい習っておかなくてはと、当時、国鉄飯田線川路駅近くにあった東京文化服装学院連鎖川路部校へ一年間通うことにした。吉川という女の先生が厳しく、きちんと基礎から指導して下さった。

同じ頃、羽仁もと子（日本初の女性ジャーナリスト。自由学園の創立者）の思想を元に活動している「友の会」で、一人前

た縁談があつて、話があつたときにはほぼ決まつていて結婚することになつたためだつた。

相手の人は下久堅知久平の斉藤明さんといい、早稲田大学文学部英文科卒業後、上郷の高陵中学校に勤める英語教師だつた。大叔父が「(婿は)よく働く家から来て貰わないと困るが、すぐ下の青島家へ(明さんの)姉が嫁がれており、その姉はよく働く人で、その弟だから」とのことで話が進んだ。それでも「一度逢わなくては」と青島へ嫁いでいる斎藤さんの姉に付き添ってもらい、飯田で見合いをした。家系なのか頭髪が薄く、口数も少ない大人しい感じの人で、わたしは「親の無い子のところへ来てくれる人はこのような人かしら……」と思つた。そして周囲に勧められるまま、特に厭いやとも思わず結婚を決めた。

結婚が決めた後の、昭和二十九年五月に、下久堅小学校裁縫室で村長さん始め村の各種団長さん方が出席され、昭和二十五年下久堅中学校卒業生の成人式をして下さつた。出席者は九十名程、十余名が欠席だつた。

三、結婚と出産

結婚式の日取りは斉藤さんの勤務の都合で学年末の学校の休みの日、昭和三十年三月二十六日と決まつた。三枮屋の恒夫ご夫妻にお願いして仲人をしていただいた。

祖父の代に「家など何時でも建てられるので、田地を増やした方が良い」との方針で来たものの、思わぬことに祖父も父も早く亡くなり、家の改修もなされないままになつていふた。そこで祝儀までに、長屋の二階階段のつけ替え、台所などの小規模な改修をすることになった。飯田病院を辞めてから、こうした家のこまごまのことなどに追われながら、わたしは祝言までの日々を過ごした。

結婚式は、自宅で、組合衆・親戚など三十人程を招いただけの質素なものだつた。明さんが二十七歳、わたしは二十二歳だつた。

四月より新しい生活が始まつた。主人は高陵中学校へ勤務。家は祖母、母と三人で守り、わたしは勤めに出ず、手伝いに来てくれる西田の千広さんを頼りに殆ど毎日のように農仕事に精を出した。翌三十一年一月十三日に長男隆平が生まれ、続いて三十二年七月八日長女みどりが生れた。二人とも西澤産婦人科病院で帝王切開だつた。当時の西澤寛志院長は、前述のように父と飯田中学同年生だつたこともあつて、入院中なにかと親切にして下さつた。

女三人だけの暮しからたちまち六人家族となり家内も賑やかになり、母と祖母の助けもあつて、わたしは子育てに農作業にと夢中で時を過ごした。まだわたしも若く、時代も高度経済成長期の前夜にあつた勢いがあつた気がする。

我が家では主人が教員だったので、春夏の休みがあり、当時まだ親子揃って出かける家が少ない中で、祖母と母に留守を頼んでは遠出を楽しませてもらった。夏は奥蓼科の宿へ泊まって八ヶ岳へ登ったり、東京オリンピックピックが開催されたばかりの国立競技場やNHK放送センター、羽田空港などへ行ったりまた恒例だった風越山への元旦登山などが、懐かしく思い出される。



孫の隆平とみどりの子守をする母

その頃は、まだまだ近所に子どもたちが大勢いて、子ども同士一緒になつては外を跳び回って遊んでいた。各集落に春秋農繁の季節だけ保育所が開設され、就学前の南原の子どもたちはお昼のお弁当を持って、当時文永寺鐘楼下の地区の集会所へ行った。保母さんとして世話をしてくださったのは、時間に余裕のある近所の小母さんたちだった。

長男の隆平は昭和三十七年、長女みどりは昭和三十九年に下久堅小学校へ入学した。入学児童は一年明組・正組の二クラスで七十人ほどで、百人以上だった戦前に比べると随分少なくなったと感じたものだった。

それでも放課後になると、子供同士誘い合つて文永寺の境内や上のお宮の広場で遊ぶ姿は以前と変わらなかつた。ある年の春先などは、家の裏の丹精して耕作されている小杉山の麦畑でキャッチボールなどをして、青く伸び始めた麦を傷めてしまうというような憎めない悪戯いたづらをしたこともあつた。